

仲座久雄と「花ブロック」

——戦後沖縄にみる建築と工芸——

磯部直希

1. はじめに

筆者は2008年に「琉球漆芸における扁額の位相」というテーマのもと、メトロポリタン東洋美術研究センターから東洋美術研究振興基金による研究助成を受け、沖縄県および関係地域において調査、研究を行った。その成果は浦添市文化部紀要『よのつち』に「琉球王国における扁額の工芸史的位相」¹⁾と題して発表した。筆者はこの論文において、首里城を中心とする琉球王国時代の扁額群を縁の形式によってⅠ～Ⅳまでの類型に分類し考察を試みた。また中国、宋代の建築書である『營造方式』²⁾に注目し、「小木作」の項目に記載が見られる「牌」の形式を一つの標準として、日本、沖縄、中国、韓国の多様な扁額を比較対照させて検討を加えた。その結果、古琉球に遡る扁額は「牌」の形式を踏襲した額縁四隅の突出部を顕著に有し、近世の琉球においては四隅の突出部を欠いた横額が登場することを指摘した。そして一連の形式上の変化を三つに大別できるものと推定したのである。この分析はいまだ仮説の段階を出ない。だが扁額は琉球王国のみならず東アジアの建築史を考える上で、日・中・韓等の影響関係について多角的な考察を可能にする媒体であり、注目すべき研究対象であることを明らかにできた。また多くの問題点や調査の余地があることを示唆する成果となった。

しかし、この調査の過程で類型上一点のみの扁額が存在することに気づかされた。上記の論文においてⅣ類と便宜上区分した「園比屋武御嶽石門扁額」³⁾がそれである。(図版1、2)Ⅰ類からⅢ類までの扁額において、額面は「額彫り」⁴⁾による漢字表記である。Ⅰ、Ⅱ類は牌の形式に由来する四隅の突出部を持ち、Ⅲ類は突出部を欠いた横額の形式である。Ⅰ類の扁額には「飲会門扁額」(図



図版1 園比屋武御嶽石門



図版2 石門扁額(拡大)

版3)のように他の木彫や石碑等との比較から、形式の上で16世紀初頭、尚真王代⁵⁾に遡りうる作例も含まれている。

ところが同じ尚真王代に創建された「園比屋武御嶽石門」の石造扁額だけは、なぜか他と全く形式を異にしており、孤立的な作例というべきである。四隅の突出部を持たない花先形の額縁形状を持ち、額面の銘文はかな文の陰刻⁶⁾によって表されている。また花先形額縁の内郭四周には、一種の唐草文様のような連続文が陽刻によって彫出されている。I類に属する「歓会門扁額」の「金龍五色之雲」⁷⁾が首里城正殿の意匠などとも共通することを念頭におくとき、「園比屋武御嶽石門扁額」の形式は他に比較する類例を持たず、特異的といえよう。

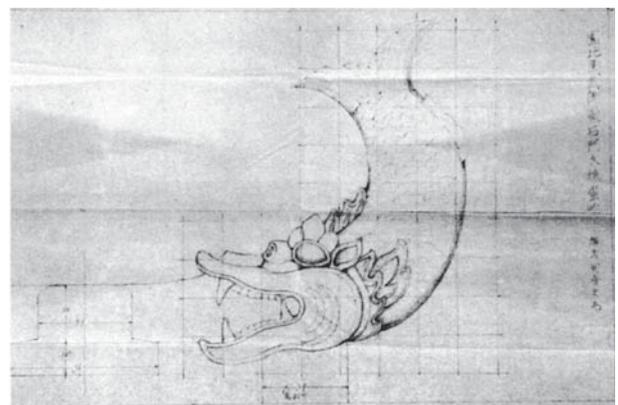
筆者はこの問題について折りに触れて調査を続行してきた。まず根本的な点として沖縄、特に首里を中心とする一帯の建築空間や文化財は凄惨を極めた沖縄戦によって大きな破壊を被り、現在なお続く戦後の復元事業によって旧観を取り戻しつつある。戦後の復元建築物の歴史的検討は、戦前の古写真や調査記録、図面、文献等に依拠しなければならない。筆者もまた扁額の調査にあたり、それらの資料群を参照した。しかし、「園比屋武御嶽石門扁額」についてだけは、戦前の形態が現状と同じであったのか、詳細がいまだ掴めていない。「園比屋武御嶽石門」自体は戦災によって大破しながらも戦後まで残存した。戦前の石門にも石造扁額が掛かっていたことは諸文献に記載がある⁸⁾が、戦災後の石門を写真によって窺う限りでは、既に扁額は消失していたようにも見える。筆者は「園比屋武御嶽石門扁額」の現状形式が、戦後の復元工事に由来する可能性を考え、関連する資料の収集にあたってきた。だが依然として扁額の形式に関する疑問を解き明かす物的証拠には至っていない。現状の扁額が戦前の扁額をどれだけ正確に踏襲したものであるのか、復元の報告書等を参照しても確たる記載がなく判断し難い。

しかし筆者は「園比屋武御嶽石門扁額」の謎を追う過程で、その復元事業に関与した仲座久雄⁹⁾という建築家について知見を得た。仲座久雄は1920年代の大阪で建築を修めて沖縄に戻った後、1936年に「守礼門」の修理工事主任として工事にあたり、戦後は「守礼門」の復元や沖縄各地の文化財資料の収集と保全に携わり、また戦後沖縄における近代的な公共建築物や住宅建築の創出に活躍した。「園比屋武御嶽石門」も、琉球政府下の文化財保護委員会委員として仲座久雄が調査に参画するなかで、1956年から翌年にかけて修理、復元された建造物である。(図版4)

仲座久雄の活動は戦後沖縄の文化財保護や復元事業の礎になるとともに、戦後沖縄における鉄筋コンクリート建築の普及と結びつけて語られる。なかでもカーテン・ウォールなどに用いられる「花ブロック」は仲座久雄の考案によるものとも言われてきた。「花ブロック」とはさまざま



図版3 首里城歓会門扁額



図版4 「園比屋武御嶽石門大棟蚩吻」復元制作図

なデザインの穴を開けたコンクリートブロックの、沖縄における通称であり、これを建物外壁面や外構などのカーテン・ウォール、目隠し壁などとして用いる。「花ブロック」を多用した建築は、今日の沖縄においてしばしば目にするスタイルとなっており、そのデザインも非常に多種類にわたる。

古建築の復元という歴史的な事業とコンクリートによる近代的な建築の創出という一見背反して見えるベクトルが、一人の建築家のなかでどのような均衡を持って成長していったのか。また彼の活動は戦後沖縄の、今日に至る都市と建築空間の生成にどのような影響を及ぼしていったのか。といった疑問が生じた。扁額の調査から派生し、仲座久雄と「花ブロック」に関して、現段階での資料や関連事項等を研究ノートとしてまとめ、今後の論文の基礎付けにしたいと考えている。

2. 仲座久雄に関する先行研究と基礎的文献資料

仲座久雄について考究する上で、基礎となる一次資料として、仲座自身の手になる①実際の建築物、②設計図等の図面類、③写真資料、④公刊された論考や対談などのテキスト、⑤未発表のノートや手控え等の記録類、などが挙げられる。また二次資料として仲座が関与した建築物等に関する同時代の①行政文書、②調査記録、③関連する写真資料、④第三者による批評等の論考、⑤新聞、雑誌などにおける紹介記事や関係記載、などが遡及して収集すべき資料群になる。それらの資料を探索し参照する上で、近年における仲座久雄を論じた先行研究や学術報告が手がかりとなる。

(1) 沖縄県立博物館における企画展

しかしながら仲座久雄についてのまとまった先行研究は、必ずしも多くない。だがそれらのなかで最も新しく、かつ仲座久雄を中心的なテーマに据えた資料として、2004年に沖縄県立博物館・美術館において開催された企画展「戦前・戦後の文化財保護～仲座久雄の活動をとおして～」¹⁰⁾が挙げられる。この企画展は2002-03年に仲座巖氏から沖縄県博に寄贈された104件の「仲座久雄資料」に基づいて構成された。この一次資料群によりつつ1戦前の文化財保護、2文化財保護の流れおよび仲座久雄年譜、3仲座久雄の文化財保護活動、4建築家仲座久雄、の四項目のトピックを挙げ、文化財保護活動を中心に仲座久雄の業績をまとめている。特に年譜には仲座久雄が折々に発表した論考のタイトルと発表年、掲載誌名が加えられており、活動履歴と一次資料とを知る上で必須の参照資料となっている。ただし建築家としての活動に関しては概略の紹介に止まっている。

(2) その他の先行研究と資料

また、仲座久雄の戦後における建築家としての活動に着目した論文として、永瀬克己と武者英二によって2004年に発表された「沖縄・小湾の戦後復興住宅と建築家仲座久雄」¹¹⁾が挙げられる。この論文は沖縄戦によって住居を失った県民に対して、米国海軍軍政府が各村に無償で提供した七万五千戸の規格住宅を取り上げ、本島南部字宮城（現小湾）地域における実状を資料と聞き取り調査などから考察した成果である。仲座久雄は1945年から米国海軍軍政府工務部に勤務し、通称「規格屋（きかくやー）」あるいは「標準屋（ひょうじゅんやー）」と言われた米国産材の2×4規格による規格住宅の設計にあたっている。この論文はその経緯に触れながら、戦時中の疎開時代に遡って仲座久雄の住居観の変遷を分析している点でも注目される。

現在のところ、仲座久雄を中心的課題とした近年の刊行物や論文はこの二点のほかには管見に入っておらず、資料調査を継続している。また、他の論考や著作、インターネット上の記述などでも通説的な言及や断片的な紹介に止まるものが多い。これらの先行研究が仲座久雄の略歴を述べる上で参照したのは、又吉真三によって『沖縄大百科事典』¹²⁾に記された仲座久雄の項目と、沖縄建築士会の年間誌『沖縄建築』における仲座久雄特集号¹³⁾である。この特集号にはさまざまな媒体に仲座が発表した文章が再録されており、永瀬・武者論文における引用も特集号に依拠している。

筆者は現在仲座久雄自身による文章をできるだけ初出に則して確認すべく資料の収集を進めている。仲座の著作活動は、沖縄県博の年譜によれば、1949年に『うるま春秋』誌上に発表された「風と火に耐える家にわれは住みたい」¹⁴⁾に始まり、翌年までに同誌上に五本の論考¹⁵⁾を投稿している。仲座はその後もさまざまな媒体に断続的に文章を発表しているが、筆者が现阶段で初出誌に目を通したのは、上記の『うるま春秋』誌上における五本の論考と座談会などの記事¹⁶⁾数本に限られているため、この研究ノートにおける引用等もその範囲において行いたいと思う。

3. 「花ブロック」と仲座久雄

(1) 戦後沖縄における「花ブロック」の普及

現代の沖縄県の建築物に対して、独特の陰影を与えている建築資材が「花ブロック」である。今日、那覇や首里はもとより沖縄県各地の都市や集落を歩くとき、さまざまな建物を介して目に入る素材と言える。(図版5-①、②、③)「花ブロック」の用途は鉄筋コンクリートの躯体に対して過重を支持しないカーテン・ウォールとして壁面を覆うもの、またベランダやテラスのスクリーンや手すりの用途で用いられている場合、隣地境界や道路に面した塀に用いられている



図版5-① 「花ブロック」を用いた建物(那覇市内)



図版5-② 「花ブロック」を用いた建物(那覇市内)



図版5-③ 沖縄県立芸術大学校舎
(首里・当蔵キャンパス)

るもの、屋上の給水塔の一部が「花ブロック」になっているビル、などさまざまである。1981年に象設計集団によって設計された「名護市庁舎」(図版6)を一つの画期として、2007年に開館した沖縄県立博物館・美術館(図版7)や、国際通りに面した商業ビル(図版8)などで近年より大規模に「花ブロック」を使用する事例も増えている。「花ブロック」による建築的景観は、いわば戦後沖縄の原風景として「沖縄らしさ」を形成してきたとって過言ではなく、その再生産と意図的な強調が近年より増えてきたとも言えるのである。

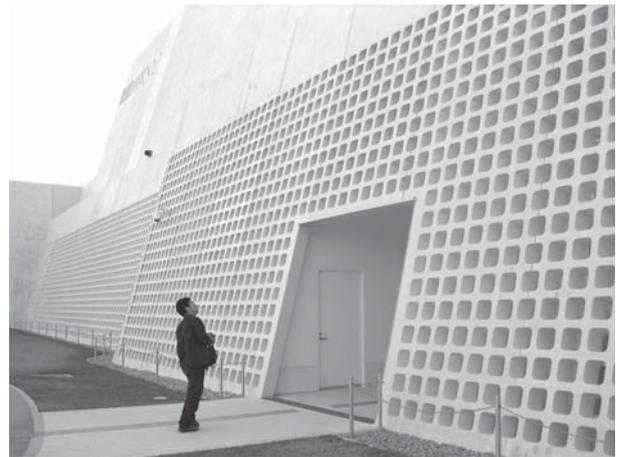
「花ブロック」は正方形、長方形などの外枠内に方形、円形などの空隙をうがったコンクリートブロックの沖縄における通称である。JIS規格による一般的なコンクリートブロック、いわゆる「空洞ブロック」¹⁷⁾が壁面をなす「フェイスシェル」と断面を繋ぐ「ウェブ」とによって構成される(図版9)のに対して、「花ブロック」は空洞部が一つの意匠としてフェイスシェル側に空けられているものといえる。繋げて用いると、その形により一種の連続文様のようにパターンが展開するのが特徴である。

今日、沖縄県内における「花ブロック」の製造は約80%を合資会社山内コンクリートブロックに負っており、同社のサイトおよび製品カタログ¹⁸⁾から「花ブロック」の材料、デザイン、製造工程などについて略述する。

「花ブロック」はセメントと潮抜きした海砂、強度を高めるための砕砂を原材料とし、その混合物



図版6 名護市庁舎



図版7 沖縄県立博物館・美術館
(「花ブロック」をイメージさせる壁面。)

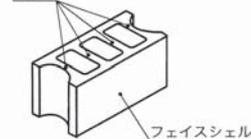


図版8 琉球美容専門学校(那覇市、クライン・ダイサム・アーキテクト、2007年)

【空洞ブロックの外部形状による種類】

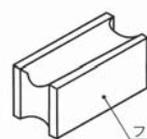
基本形ブロック

ウェブ



フェイスシェル

基本形横筋ブロック

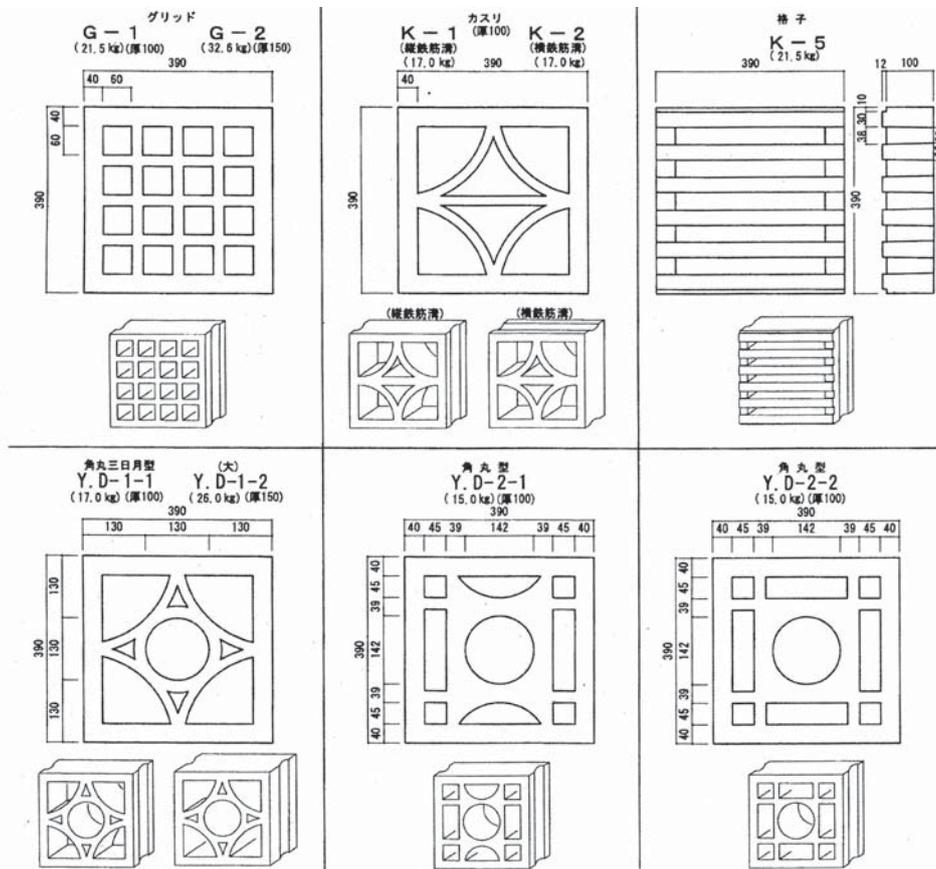


フェイスシェル

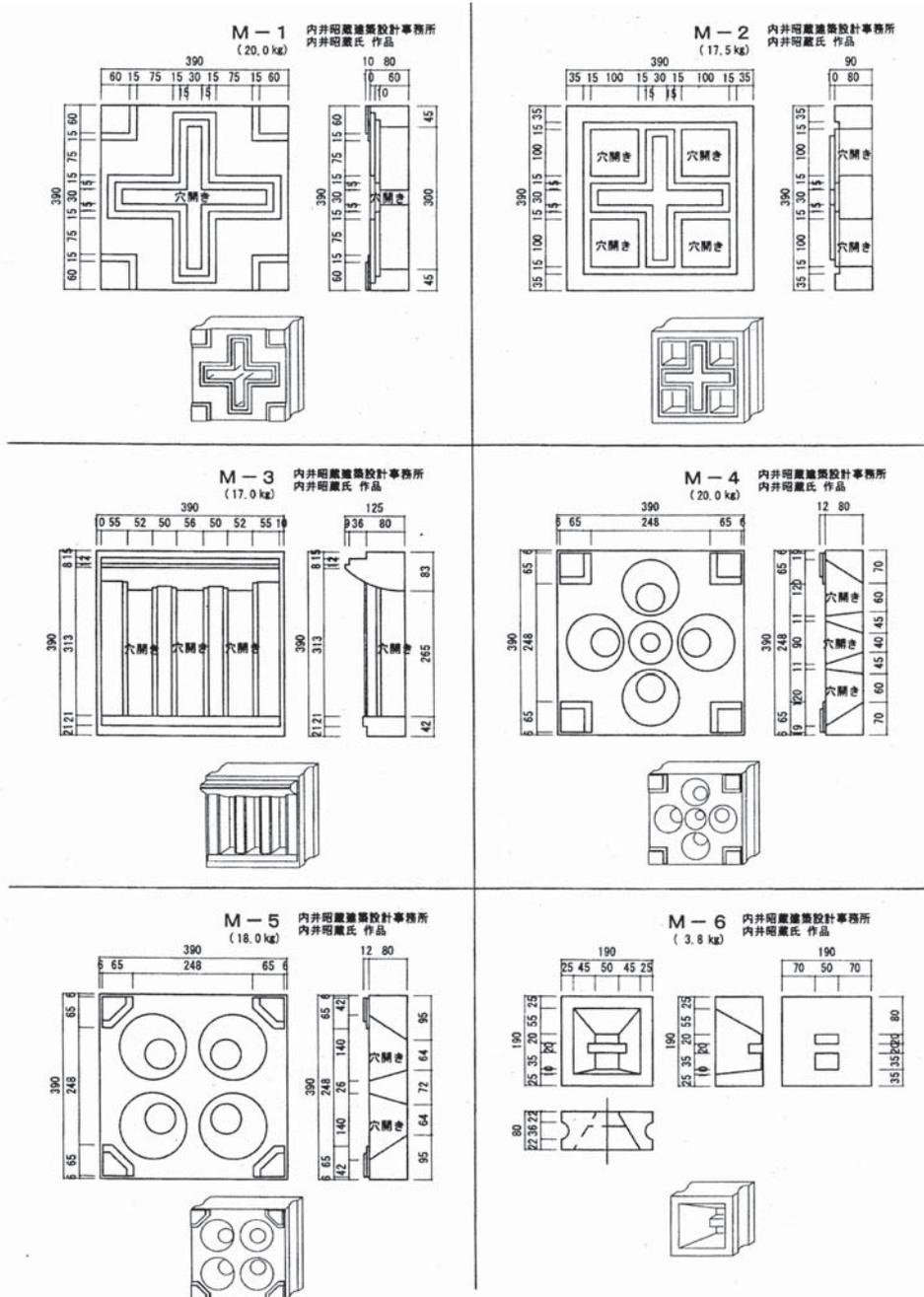
図版9 空洞ブロックの外部形状による種類

を金型に流し込み、振動を与えながら固める。蓋をして金型を裏返し、専用の機械でプレスする。その後型から外して養生室で一晩自然乾燥させて完成品となる。一連の作業は人の手に負う部分も多く、一つ一つ型抜きによって作られており、一日に200から300個製造され沖縄県内には一個あたり150円から販売されている。金型の製作も熟練した職人の技量に負っているという。

その種類は、同社においては長方形の4インチ、6インチ、正方形の40センチ角のサイズを中心に百種類以上のデザインに及び、オリジナルのデザインも受注生産を受けている。主要な製品は「ダイヤ型」、「角型」、「波型」、「X型」、「カスリ」、「グリッド」、「すじ型」、「格子」、「角丸型」、「角丸型四角」、「丸型」、「角丸（三日月）型」、「十字型」、「二重角型」、建築家の内井昭蔵¹⁹⁾のデザインによる「M-1」、「M-3」、「M-4」、「M-5」、「M-6」、「M-8」など、透かしの形ごとに名称分けがなされている。(図版10-①、②)戦後沖縄における、これらの「花ブロック」を含むコンクリートブロック製造の成立史に関しては、小倉暢之による研究報告「戦後沖縄におけるコンクリートブロック品質保全法の成立過程」²⁰⁾が参考となる。同報告によれば「戦後沖縄の建築界は殆どの建物がコンクリート造で建設されるという特異な歴史を持っており(中略)その品質が建築形態の形成に及ぼした影響も大きい。」²¹⁾とされる。また、コンクリートブロックは台風による被害に強く、シロアリによって腐朽せず、セメント、砂、骨材等の主要原料が地元で調達可能で、小規模の生産設備でも製造が可能であることなど、沖縄にとって複数の好条件が相俟って、戦後の復興期に生産が急拡大した建材とされている。その直接の契機は1948年に米軍の工兵隊がコンクリートブロックの製造機を導入し、軍の施設や基地内の住宅建設に充てたこととされる。翌年には、沖縄最初のブロック製造業者が創業し、また翌々年には政府公共施設をコンクリート造に転換するなど、米軍の軍工事を含め官民を挙げてコンクリート造やコンクリートブロックを用いた建築の推進が図られた。²²⁾



図版10-① 山内コンクリートブロックの「花ブロック」



図版 10-② 山内コンクリートブロックの「花ブロック」

(2) 仲座久雄と「花ブロック」の関係性

「花ブロック」もまた、沖縄の戦後復興の過程で普及した建材であった。その「考案者」に比定される建築家として仲座久雄が挙げられてきた。仲座久雄は1956年に自社ビル「仲座久雄建築設計事務所」を設計し、那覇に建設している。同ビルは現存しないが「仲座考案の花ブロックを建物四面に使った軽快で斬新な建物」²³⁾であったとされ、その外観は写真資料等からも確認することが可能であり、円形、楕円形を用いた三種類ほどのパターンが見て取れる。(図版11) このビルは仲座久雄と「花ブロック」とを結びつける実例と言えるだろう。仲座久雄は「花ブロック」を「異型ブロック」と呼称していた²⁴⁾という。また沖縄県博図録に転載された「旭セメントブロック瓦製作所」のパンフレットを見ると、「花型ブロック」の名称とともに仲座久雄の自社ビルの写真が掲載されている。(図版12) 「異型」、「花型」、「花形」などの呼称が「花ブロック」に収斂する過程にも興味深い問



図版 11 仲座久雄建築設計事務所ビル



図版 12 旭セメントブロック瓦製作所パンフレット

題がある。今日、沖縄県以外の地域では、この種のコンクリートブロックを「スカシブロック」、「異形ブロック」、「ホローブロック」などとさまざまに呼ぶ。「空洞ブロック」を用いた住宅街のブロック塀などに数個埋め込まれ、視覚的アクセントや風通しなどのためにごく控えめに用いられていることが多い。²⁵⁾ (図版 13-①、②、③、④、⑤)

筆者が一連の資料を読むなかで感じた研究上の課題を三つに整理してみると、①戦後沖縄における「花ブロック」の生成と普及に関する建築史的調査、②仲座久雄と「花ブロック」の関係性について実際の建物と建築思想の両面からの調査、考察、③「花ブロック」の名称にまつわる分析。「花ブロック」に「花」という語が充てられたのはなぜか。といった事柄が挙げられる。筆者はこれを沖縄の建築と工芸の両面から考察してみようと思う。これら三つの課題にまつわる現在の仮説や推論を以下に述べてみたい。

また仲座久雄の他の建築作品としては、首里博物館（1953年）、子供博物館（1954年）、琉球大学志喜屋記念図書館（1955年）、琉球放送首里スタジオ（1955年）、那覇市営識名霊園納骨堂（1957年）、伊波普猷顕彰碑（1961年）、星印刷（1962年）などが挙げられるが、これらの建物で必ずしも「花ブロック」が用いられたわけではない。（図版 14）仲座が関わった建築物で自社ビルの他に「花ブロック」が施行された作品がどのくらいあるのか、という点も今後の調査課題として挙げておきたい。



図版 13 - ①



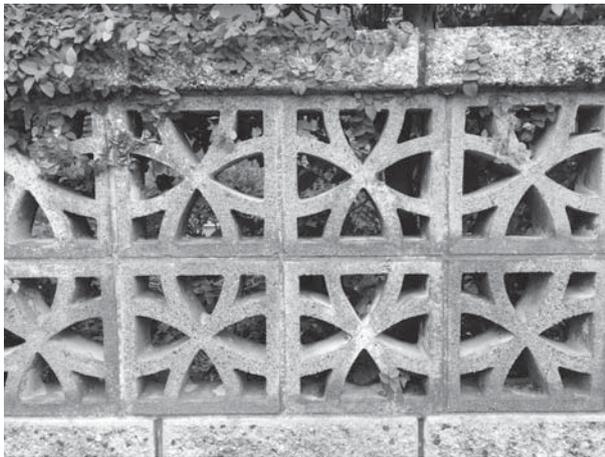
図版 13 - ②



図版 13 - ③



図版 13 - ④



図版 13 - ⑤

図版 13 - ①、②、③、④、④、⑤

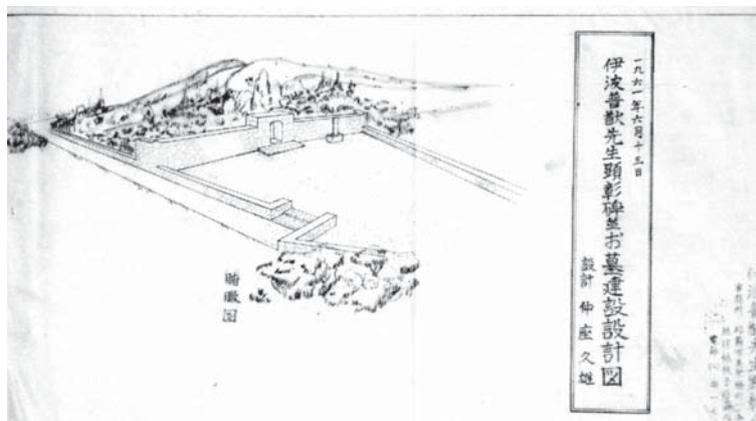
本州各地における「スカシブロック」の使用例

①京都市右京区、

②、③、④京都市東山区、

⑤静岡県富士市

③は陶器製か。



図版 14 「伊波普猷先生顕彰碑並びにお墓建設設計図」

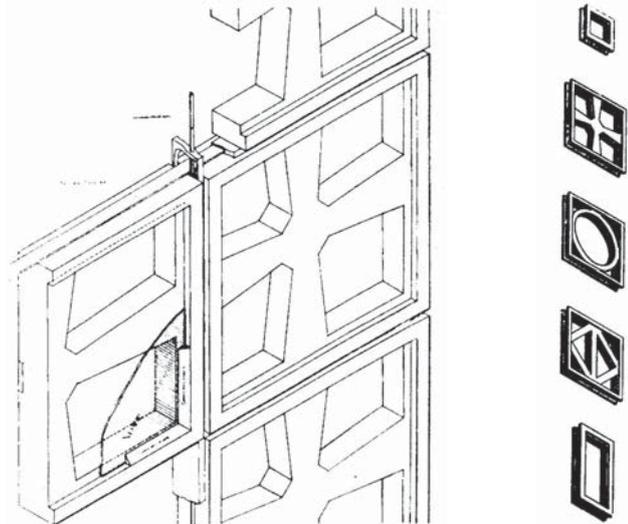
4. 近代建築史、工芸史にみる「花ブロック」の位相

(1) 「花ブロック」前史の建築史的検討

「花ブロック」のようなタイプのコンクリートブロックを用いた建築を、歴史的に遡及するとどのような前史が考えられるだろうか。20世紀前半のフランスにおいて鉄筋コンクリート造のパイオニアとして建築の近代運動を担ったオーギュスト・ペレ²⁶⁾の最高傑作、「ル・ランシーのノートルダム教会堂」²⁷⁾に着目してみたい。

「ル・ランシーのノートルダム教会堂」は1923年に献堂された鉄筋コンクリート造による建築物である。「近代の鉄筋コンクリート造教会の雛形」²⁸⁾としてフランスのみならず世界中に模倣作品を生み出した²⁹⁾とも評価されている。この教会堂は荷重を支持しないカーテン・ウォールによって外壁面を構成している。特に腰壁から上部の天井一杯までを、穴の開いた方形のプレキャストコンクリート部材の組み合わせによる窓とし、穴の部分に色ガラスを嵌め込んでガラスのスクリーンにしている点が大きな特徴である。³⁰⁾この透かし穴の開けられたコンクリート部材を、ペレは「クロストラ」³¹⁾と称した。(図版15)吉田鋼市によれば「クロストラ」とは、ゴシックの教会堂に見られる石造トレーサリーの窓の、中世における呼称に由来するもの³²⁾という。ル・ランシーにおいて、ペレは五種類のクロストラをデザインし

ている。(図版16)正方形の枠のなかに、ラテン十字、円形、二分正方形を組み入れたものと、正方形、長方形の枠のみのタイプとに分かれる。このクロストラの空隙に色ガラスを入れ、壁面に大きな十字架のデザインを描いた。また、天井の照明穴、階段の手すり等にも同じクロストラを使用して「クロストラのシンフォニー」³³⁾と評される空間を創出したのである。ペレの業績も与って、今日「クロストラ」の語はコンクリートやテラコッタ製の格子状パネルの総称として普及している。



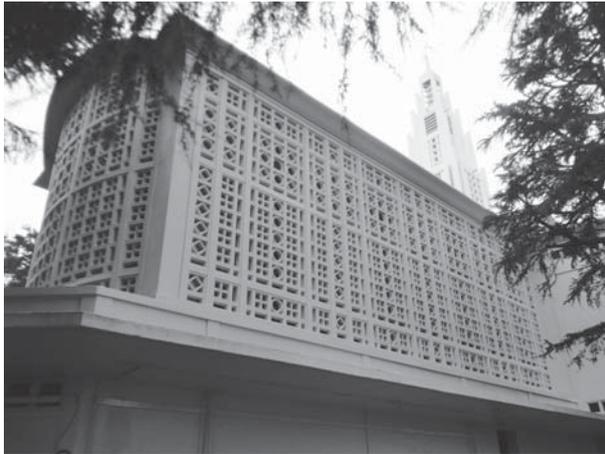
図版15 ル・ランシーのノートルダム教会堂における「クロストラ」の壁面



図版16 五種類の「クロストラ」

ペレによるル・ランシーのスタイルは、アントニン・レーモンドの設計による「東京女子大学礼拝堂及び講堂(1934-37年)」によって、十年程の時間差で日本にももたらされた。(図版17-①、②)この礼拝堂におけるレーモンドの設計は「ル・ランシーのノートルダム教会堂」に非常に酷似しており、クロストラもまたレーモンドによって模倣された。³⁴⁾レーモンドのクロストラも、リブによって強調された方形の枠の中に、十字、円、菱形、二分正方形などの幾何学的な形態を表し、色ガラスを嵌め込んで教会堂壁面を覆っている。ペレやレーモンドによるクロストラの壁は、ゴシックの教会堂におけるステンドグラスの窓や石造トレーサリーを、コンクリートによって置き換えたような印象になっているといえよう。

「クロストラ」と「花ブロック」、また仲座久雄を繋ぐ影響関係については分明的でない。米軍によってもたらされたコンクリートブロックのなかに「クロストラ」に類する穴明きブロックが存在した



図版 17-① 東京女子大学礼拝堂及び講堂(外観)

図版 17-② 東京女子大学礼拝堂及び講堂(内部)

可能性も推測される。あるいは仲座自身もペレやレーモンドの建築に関する知見を直接、間接に持ち、「花ブロック」のデザインを行った可能性もあるだろう。「花ブロック」が戦後沖縄の建築に登場する前史には、近代建築史のメイン・ストリームにも関わる多様な伏線が垣間見える。それらの歴史的検証と考察もまた、本研究における今後の課題として挙げておきたい。

(2) 仲座久雄の建築思想にみる「花ブロック」

仲座久雄自身の文章のなかに「花ブロック」について触れた記述はないのだろうか。筆者は現段階では1949年から翌年にかけて発表された論考を手にしており、それ以降のテキストについては継続的に収集を進めているため、記述の有無については即断できる状況にない。だが仲座の論考には沖縄における住宅建築の方向性として、木造から石造、煉瓦、コンクリート造への転換を推進するという一貫した主張がみとめられる。戦災によって焦土と化した沖縄の復興において、気象条件に鑑み台風に耐え得る家屋の必要性を強調し、その上で首里の「園比屋武御嶽石門」や「崇元寺石門」などを念頭に「戦前國寶に指定された建造物の大半は石造建物であったことを記憶せられよ。」³⁵⁾と述べ、石造の建物が沖縄の建築史的な系譜に背くものではないことを主張している。また物資に乏しい戦災後の状況下において、路傍に豊富にある琉球石灰岩の小石を積み、壁面を構築する住宅設計を提示している点が注目される。「沖なわは石原小石原と云われじよう緑の美しい島で 此の小石積は實に美しく調和します。糸満の海邊の小石積も 田舎で散見する石垣の小石積も首里市内の小石積の石垣も戦前那覇市内に在つた瓦石垣も其風情に調和して居ました。(中略) 吾々のせん祖は實に巧に此の小石を使ひこなして居ました 今後も現在も昔も建築用材としての木材に恵まれない沖縄に 此の小石こそ神が此の島に與へた美しい小石の様な気がします。(中略) 石材の豊富にある地方で一ぶ落を屋敷周囲の石垣を撤廢して道路を整然と計畫しじゆう居の壁を石垣にし統一のとれた様式の石造家屋がズラリと建ち並んだぶ落が出来たら、どの様にすばらしいだろうと夢見つゝ計畫して見たいと考えます」³⁶⁾と、仲座久雄は記している。戦前の沖縄に多く存在した屋敷地や集落における石垣の景観(図版18)を石造住宅の壁面に転換して再生し、道路を拡幅して近代的な都市や住宅群を作り上げていく、という沖縄の未来像が描かれている。「沖縄は石原小石原」とは、「琉球節」に由来し、石ころばかりの土地という揶揄的な含みを持つが、その小石、つまり琉球石灰岩の不定形でポコポコとした質感に、むしろ風土と調和した美観が存在することを仲座久雄は繰り返し強調している。「頭蓋骨の様な小石でも利久が今沖縄に生きていたら、台湾蕃人の首垣の様に美しき邸宅

が出来たであろう。」³⁷⁾とも述べるのである。その上で、小石積の美について「美しき穴明きの小石積」³⁸⁾と表現している箇所が特に注目される。この文章が書かれた1949年は沖縄において最初のコンクリートブロック業者が創業し、軍工事ブームが始まった年³⁹⁾でもある。仲座久雄はコンクリートの生産が拡大する五十年代以降、コンクリートブロックをもって「美しき穴明きの小石積」を実現する方法として、「花ブロック」に着目したのではないだろうか。米軍が沖縄に導入したコンクリートブロックのなかに「クロストラ」に類する穴明きブロックが当初から存在していたのか、現時点では明らかではない。戦後沖縄の建築において、いつ「花ブロック」が登場したのか。どのような過程を経て普及を見たのか。といった問題も分明ではない。仲座久雄の「穴明きの小石積」が「花ブロック」に通じるのか、今後の調査のなかで再検討を試みたいと思う。仲座久雄は沖縄の気候や環境などの地域性と、王国時代の建築物に対する歴史観とを自覚的に対象化し、これを近代のコンクリート造と結節させる地点に立っていたのではないかと、筆者は推測している。「花ブロック」はその象徴的な建材であるように思う。これらの仮説もまた今後の資料調査および現地調査等に論証を俟つ、最も重要な問題と言える。



図版 18 集落内における石積みの区画
(伊是名島、2008年)

(3) 「花ブロック」の名称に関する検討

現在沖縄の「花ブロック」には百種類以上のデザインが存在し、戦後沖縄の都市、集落や町の景観において原風景を構成してきた建材であることはすでに述べた。沖縄において特に「花ブロック」が普及した理由については、更に考察を加えるべき点が多い。クロストラに連なる穴明きブロックの欧米や他地域における伝播の問題や、実際の建築物における用いられ方の検討なども重要である。「花ブロック」が沖縄に登場した契機には米軍の介在があるのか、あるいは仲座久雄個人の創意工夫に帰せられるのか、その両者の影響があるのか、といった歴史的な検証にも依るべき資料の発掘が必要である。今日では「花ブロック」は沖縄の気象条件や環境に適合した建材とみなされている。沖縄の強い日射しを適度に遮って美しいシルエットを作り出し、通風を確保しながら台風などの強風に対して抵抗性を有すること、また人の視線も適度に遮断してプライバシーを確保する働きなど、この建材が沖縄において発揮する美観と実用性には瞠目すべき点が多い。仲座久雄に代表される戦後沖縄の建築家たちの活動が、「花ブロック」を含むコンクリート造の建物を在来の石造文化と結び付け、沖縄の地域性や歴史性に根差した建築的表象へと育てたことも、その普及を促進した要因であったと推測される。

このような前提の上で、筆者はさらに「花ブロック」という言葉自体の問題について踏み込んだ考察を試みたい。仲座久雄はこの建材を「異型ブロック」と称し、また他地域では「スカシブロック」などさまざまな呼称があることは先に述べた。沖縄でのみ「花ブロック」という名称が広く一般化しているように見えるが、これはなぜなのだろうか。また、なぜ「花」という言葉がここに冠されているのか。「異型ブロック」を「花ブロック」と改称したのは誰か。

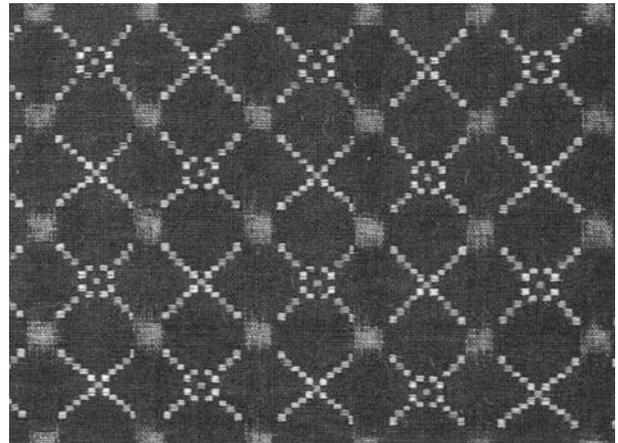
筆者は「花ブロック」が沖縄において特に普及し、また現在まで多様なデザインが生み出されてきた要因の一つは、「花」という言葉自体の力にあるのではないかと仮説を立てている。「花ブロック」は一つ一つのブロックが植物の花をモチーフにデザインされているわけではない。どの種類のブロックもたいていは幾何学的であり、また抽象的な形と言えるだろう。つまり「花ブロック」の「花」は、花のように見えるといった意味の、形態の類似を示す言葉とは思えないのである。では、この「花」は何を意味し、また何に由来する表現なのだろうか。筆者は「花ブロック」の「花」は沖縄の織物における「花織」（はなうい）の「花」と共通性を持つ表現なのではないかと推測する。

「花織」は糸を浮かせて文様を表す浮織の沖縄における総称である。その技法は奄美から与那国に至る琉球弧の島々に点在する。浮かせる糸によって「経浮花織」、「緯浮花織」、「両面花織」があり、さらに「ハナ糸」を手で入れる「手花織」に区分される。「花織」の「ハナ」は植物の花の形象を表しているのではなく、文様やパターン自体を意味する語として用いられているのである。

琉球王国時代、王府の置かれた首里では首里城の御内原や士族の家庭などで七種類以上の織物が伝承されていたという。首里の「花織」⁴⁰⁾は表裏両方に糸を浮かせた「両面花織」に代表されるように、黄、赤、青、緑などの鮮やかな色糸を用いた幾何学的な小花文様を特徴とする。また「花織」と「紹織」を組み合わせた「花倉織」は最も高級な夏の衣料として王家にのみ伝承された織物という。これらの首里の織物は近代に至って沖縄県立女子工芸学校における染織教育の範例となり、沖縄の「伝統工芸」⁴¹⁾として現代に継承されてきた。

また本島中部の読谷や知花で庶民の晴着として織られてきた「花織」⁴²⁾による衣装は、紺地に白や赤、黄などの色糸を織り込んだもので、いったんは途絶しながらも、近年にかけて技法の復活や新たな伝承が模索されている。この他にも女性が男性のために織ったティサージ（手巾）などの「花織」が良く知られている。

これら「花織」の文様には、浮織の形をものに見立てて「カジマヤー（風車）」や「ジンバナ（銭花）」などの個別名称が付されている。しかしそれらは「絵紺」のように具象的な図像を表しているわけではなく、幾何学的な形象の連続文であり、抽象的なパターンとも見えるのである。（図版19）



図版 19 木綿 紺地読谷山花織袷上衣（部分）
（沖縄県立博物館蔵）

「異型ブロック」などと呼ばれていたコンクリートブロックに「花型ブロック」、「花ブロック」の名称を与えたのが誰なのかは未だ不明である。しかし「花織」の「花」と「花ブロック」の「花」とは、ともに文様やパターン・デザイン自体を指しており、同じ用法の語と言えるだろう。「クロストラ」が石造のトレーサリーに由来し、ゴシックの教会堂をイメージさせる含意を持つと同様に、「花ブロック」は「花織」に代表される琉球王国時代の織物を想起させる。沖縄における「花ブロック」の多様な展開は、建築的であるよりはむしろテキスタイルの豊かさに近く、工芸的な側面を持つと言えないだろうか。

筆者は「花ブロック」成立史の背後に、沖縄の近代あるいは戦後における、建築と工芸との隠れたクロス・ポイントを透かし見ることが可能ではないかと考えている。その検証には仲座久雄や彼以降の建築家たちの業績や思想を分析するとともに、近代の沖縄に工芸の側から大きく関与した

民藝運動や工芸学校の役割など、同時代性をより幅広く踏まえた調査、研究が必要となる。

5. まとめと今後の展望

仲座久雄と「花ブロック」の問題について、筆者の現段階における研究ノートは以上のように概括され、研究上の問題点や今後の展望などが浮かび上がってきた。課題としてまず実施すべきは、仲座久雄に関する資料調査であることは論を俟たない。既述したように仲座久雄の資料群は、大別すれば古建築・文化財の調査や復元に関するもの、建築家として設計あるいは施工に関与した建築群、建築についての評論等によって構成されると言うて良い。前二者は実際の建築物とそれに関連する調査報告、図面等の文献資料を含み、より広範な現地調査を踏まえた資料収集が必要である。また評論等の資料に関しても引き続き探索と収集を進めていきたい。その上で、日本の近代建築史、工芸史上における「花ブロック」の位相について、多角的な視座から考察を試みるのが大目標と言える。

大正期に遡って考えてみると、中村式鉄筋コンクリート（鎮ブロック）⁴³⁾の開発や、鎮ブロックを実際の住宅建築に用いた京都・衣笠の本野精吾邸（1924年）⁴⁴⁾など、日本のコンクリートブロック建築の成立に関する先駆的な事例は既にさまざまな角度から研究の対象となってきた。

沖縄においては沖縄戦による既存の都市や集落に対する大規模な破壊と、米軍による統治という戦後の体制により、コンクリートブロックによる建築が一つの地域を特徴付けるスタイルとして広まった特殊な経緯を持つ。沖縄の占領軍におけるコンクリート住宅建築に関しては既に幾つかの調査、研究がなされてきた。⁴⁵⁾だが「花ブロック」については米軍とどのような関係性を有するのか、資料の上から明らかにされているとは言えない。「花ブロック」の成立史について、以上のような基礎研究を踏まえて経緯を明らかにし、意匠論や表象論的な考察に論を深めたいと考える。

「花ブロック」は戦争を含む近代史のなかで、沖縄に登場した建材である。だが「花」という言葉に着目した時、仲座久雄とそれに続く人々がこの建材を戦前の沖縄の建築文化や「花織」などの工芸と結び付け、一つの地域を表象する媒体へと導いて行った可能性に気づかされる。「花ブロック」のパターンの多様性は、ケネス・フランプトンのフランク・ロイド・ライトについての批評を借りるならば、まさに「テキスタイルの隠喩」⁴⁶⁾というべきものではないだろうか。また「花ブロック」を近代建築史のメイン・ストリームにおいて検討してみる上で、オーギュスト・ペレによる「クロストラ」についての研究も重要な参照事項となる。「クロストラ」と「花ブロック」の間には系譜的な影響関係が存在するのか。またその流れはどのように遡及することが可能であるのか。アントニン・レーモンドやフランク・ロイド・ライトなど大正期以降の日本において、近代建築の生成に関与した建築家たちからの影響も含め、考察すべき余地は多い。

「花ブロック」の個々のデザインについても興味深い点が多い。百種類ものデザインが一度に作り出されたわけではなく、現在までの間に次第に増えてきた結果である。その過程では建築家の内井昭蔵がデザインしたシリーズなど、作者が明確なものもある。「花ブロック」のデザインをそれぞれのタイプやモチーフ、考案者などの視点から分類し、より詳細な分析を加えることも重要な課題の一つである。

「花ブロック」の歴史性をより深く考察するためには、近代におけるコンクリート建築の成立や建

築におけるモダニズムの問題を踏まえた、巨視的な視座を必要とする。沖縄という地域性と近代のコンクリート建築における普遍性とが一つの建材を媒体として、どのように交錯してきたのかを考える必要があるだろう。⁴⁷⁾ その交錯点に仲座久雄はいかなる形で立ち、後世に影響を及ぼしたのか。今後の研究のなかで調査と考察を進展させながら、筆者の見解を述べていきたいと思う。⁴⁸⁾

註

- 1) 望月規史との共同論文、沖縄県浦添市教育委員会文化部文化課『よのつち 浦添市文化部紀要』第6号、2010年、pp. 79-96.
- 2) 北宋哲宗の元符3(1100)年に李明仲が奉った、宋代中国における建築技術の総合書。竹島卓一『營造方式の研究』中央公論美術出版、1997年。
- 3) 「園比屋武御嶽石門」(そのひゃんうたきいしもん)。龍潭と円鑑池から首里城にかけての急傾斜の緑地帯は「ハンタン山」と呼ばれ、戦前にはアカギの大木が幾本も繁る森であった。この「ハンタン山」一帯を「園比屋武御嶽」という拝所として尊び、国王外出の際に帰路往路の安泰を祈願した。「園比屋武御嶽」を拝するために尚真王の四十三年、1519年に八重山の西塘によって建造された石門が「園比屋武御嶽石門」である。1933年に国宝に指定されたが戦災で大破、1957年に復旧、1981年から86年にかけて解体調査と修理が行われ現在に至る。那覇市教育委員会文化課『重要文化財園比屋武御嶽石門保存修理工事報告書』1986年。
- 4) 扁額の文字の彫刻技法は大きく分けて三つある。奈良平安期から行われてきた「薬研彫り」。それ以降に普及した「額彫り」、「底丸」である。文字断面の形状は「薬研彫り」がV字状、「額彫り」は中央を扁平にしたW字状、「底丸」はU字状である。(以上、京都寺町二条、清水末商店のご教示による。)琉球王国において製作された扁額には「額彫り」と近い形状だが、線の中心の凸部をより平坦に処理した彫り方のものが多い。高澤浩一はこれを「浮かし彫り」とも記述している。高澤浩一「王文治が琉球に残した書」、『大東文化大学漢学会誌』2004年。
- 5) 尚真王(在位1477-1526年)、第二尚氏王統第三代国王。第二尚氏の全盛期をなす。「歓会門」の創建も尚真王代とされる。
- 6) 沖縄県内に産する細粒砂岩(ニービヌフニ)製の扁額には「首里の王おきやかもいかなしの御代にたて申候 正徳十四年己卯十一月二十八日」と刻まれている。この銘文により1519年の創建とされる。
- 7) 正殿の彩色は1768年の修理記録「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」に記載があり、向背柱等に「金龍五色之雲」の注記が見られる。「歓会門扁額」等の復元に関しては、前田孝允『金龍五色之雲』前田漆芸アトリエ、1998年などに詳しい。
- 8) 戦前、沖縄の工芸を多岐に渉り踏査した柳宗悦は、この扁額の銘文を文章中に再録しているが、「文字は既に摩滅していて読み取れない」とも述べている。風化や摩滅が進行した状態であったと仮定するならば、額縁の形状や唐草文様の浮き彫りなどはどのような状態だったのだろうか。柳も額縁形状などは記していない。ちなみに戦後復元された同門の鴟吻は、彫刻家山田真山による「芸術的」造形であったことが、前掲報告書p.50に詳しく記されている。
- 9) 仲座久雄(1904-1962年)。沖縄県中城間切津覇に出生。17歳で大阪に出て東洋紡績に勤務しつつ大阪市立関西工学校建築科、大阪市立西天満商工専修学校工業部建築科等に学ぶ。また同時にキリスト教社会運動家、賀川豊彦の弟子であったという。1955年に創立された沖縄建築士会において初代から5代まで会長を勤める。
- 10) 沖縄県立博物館『戦前・戦後の文化財保護～仲座久雄の活動をとおして～』(企画展図録)、2004年。
- 11) 永瀬克己、武者英二「沖縄・小湾の戦後復興住宅と建築家仲座久雄」、日本民俗建築学会『民俗建築』第125号、2004年、pp. 67-75.
- 12) 沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、1983年。又吉真三は建築家、歴史家、沖縄建築士会12代会長。『琉球歴史総合年表』(1988年)等の著作あり。
- 13) 沖縄建築士会『沖縄建築』、1990年。
- 14) 仲座久雄「風と火に耐える家にわれは住みたい」、うるま新報社『うるま春秋』創刊号(1巻1号)、1949

- 年、pp. 3-4.
- 15) 「風と火に耐える家にわれは住みたい」(1949年)、「石の家」、「築城と観光」、「在りし日・琉球建築の粹」、「煉瓦の家」(1950年)。
 - 16) 仲座久雄ほか「住宅座談会」、沖縄建築史会『沖縄建築士』、1960年、pp. 17-27. 仲座久雄「五周年をかえりみて」、沖縄建築士会『沖縄建築士』、1961年、p. 2.
 - 17) 経済産業省産業技術環境局産業基盤標準化推進室「建築用コンクリートブロックのJISを改正－資源循環型社会への対応に向けて、より使いやすい規格をめざして－」、2010年。<http://www.jisc.go.jp/newstopics/2010/201010concreteblock.pdf>
 - 18) 合資会社山内コンクリートブロック <http://www.yamauchi-cb.jp>
 - 19) 内井昭蔵 (1933-2002年)。戦後日本を代表する建築家の一人。世田谷美術館、浦添市美術館等の作品を手がける。正教徒としても知られ『ロシアビザンチン－黄金の環を訪ねて』丸善、1991年、や、『装飾の復権－空間に人間性を』彰国社、2003年、等の著書がある。またフランク・ロイド・ライトの手紙なども翻訳、出版している。
 - 20) 小倉暢之「戦後沖縄におけるコンクリートブロック品質保全法の成立過程」日本建築学会『日本建築学会研究報告・九州支部.3計画系』第43号、2004年、pp.593-596.
 - 21) 同論文、p.593.
 - 22) 同論文、p.596.
 - 23) 沖縄県立博物館、前掲書、p. 36.
 - 24) 合資会社山内コンクリートブロック、前掲サイト。
 - 25) 内地における「スカシブロック」は多くの場合、いわゆる「ブロック塀」に嵌め込む形で用いられている。また「ブロック塀」自体が1978年の「宮城県沖地震」による倒壊死傷者の発生を契機として問題視され、昨今では全国各地の自治体で生け垣への転換などを推奨する助成金が設けられている。沖縄では従来地震のリスクが低く考えられてきたが、東日本大震災を転機として、また戦後のコンクリート建築の老朽化を踏まえて、地震リスクに対する見直しが図られている。
 - 26) オーギュスト・ペレ (Auguste Perret, 1874-1954年)
 - 27) ル・ランシーのノートルダム教会堂 (L'église Notre-Dame du Rancy)
 - 28) 吉田綱市『オーギュスト・ペレ』鹿島出版会、1985年、p. 79.
 - 29) 同書、p. 79.
 - 30) 深川絵里香、羽生修二「ル・ランシーのノートルダム教会堂の保存・修復について～近代鉄筋コンクリート造建築の最初期の修復事例として～」、日本建築学会『学術講演梗概集・F-2、建築歴史・意匠』、2005年、pp. 397-398.
 - 31) クロストラ (Claustra)
 - 32) 吉田綱市、前掲書、p.85。「クロストラという術語はあまり一般的ではないが、クロストロム (Clastrum) というラテン語起源の術語は、中世でよく用いられた石造トレイサリイの窓を指して建築の世界でよく用いられていたらしい。このクロストロムの複数形がクロストラであるが、ここれは今日ではコンクリートやテラコッタ製の格子状パネルを意味する術語として用いられている。」
 - 33) 吉田綱市、前掲書、p.86.
 - 34) 三沢浩『アントニン・レーモンドの建築』鹿島出版会、2007年、pp. 52-53.
 - 35) 仲座久雄「風と火に耐える家にわれは住みたい」、前掲書、p. 3. 崇元寺石門は仲座久雄の蒐集した資料によって1952年に復元された。この他にも浦添ようどれの修復(1955-56年)に関する調査、旧円覚寺放生池、玉陵の敷地保存など、仲座久雄が直接間接に関与した文化財や建造物は沖縄県各地に所在する。
 - 36) 仲座久雄「石の家」、うるま新報社『うるま春秋』1・2月合併号(2巻1号)、1950年、pp. 3-4.
 - 37) 仲座久雄「風と火に耐える家にわれは住みたい」、前掲書、p. 3.
 - 38) 仲座久雄、p. 3.
 - 39) 小倉暢之、前掲論文、p. 596.
 - 40) 首里に伝承された各種織物は1983年の通産省伝統産業法指定申請の際に「首里織」と総称された。「沖縄県工芸振興センター」<http://c8.x316v.smilestart.ne.jp/kougei/syuri.html> および「那覇伝統織物事業協

同組合」<http://www.shuri-ori.com/company.html>などを参照。

- 41) 「伝統工芸」、「経済産業大臣指定伝統的工芸品」とは「伝統的工芸品産業の振興に関する法律（1974年5月25日、法律第57）に基づいて経済産業大臣により指定された日本の伝統工芸品を指す。行政用語としては「伝統的工芸品」と呼ばれる。沖縄においては久米島紬、宮古上布、読谷山花織、読谷山ミンサー、琉球緋、首里織、与那国織、喜如嘉の芭蕉布、八重山ミンサー、八重山上布、琉球びんがた、壺屋焼、琉球漆器、知花花織の14品目が指定を受けている。知花花織の指定は2012年のことであり、記憶に新しい。
- 42) 「読谷山花織事業協同組合」http://www.yomitanhanaori.com/contents/detail.php?page_id=5 「知花花織事業協同組合」<http://www.chibana-hanaori.com>など参照。これらの花織衣装は、ウマハラシー（競馬）や無病息災と五穀豊穡を祈願する女性たちの円陣の踊り「ウスデーク」の晴着などとして用いられた。「知花花織」は近年まで研究者や県工芸指導所などがわずかに伝承していたのみであったが、2000年に入り片岡淳琉球大学教授の指導下で幸喜新氏によって新たな織り手の育成が図られ、沖縄市の産業化に向けた支援事業として後継者育成を軌道に乗せた。2008年に事業協同組合が発足し、2010年には沖縄県伝統工芸品の指定を受け、2012年に至って国指定の伝統的工芸品となるなど、「復活」を果たした「伝統工芸」として、新たな商品開発なども含め、今後の展開が注目される。
- 43) 「中村式鉄筋コンクリート研究会」<http://nrck.blog19.fc2.com/blog-category-0.html#no63>
- 44) 『建築家・本野精吾展－モダンデザインの先駆者－』（展覧会図録）、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、2010年。
- 45) 小倉暢之「沖縄の外人向け貸住宅に関する研究 コンクリートブロック住宅について」、日本建築学会『日本建築学会研究報告・九州支部・3, 計画系』第32号、1991年、pp.397-400。
小倉暢之「沖縄の公社住宅に関する研究：初期コンクリートブロック造住宅について」、日本建築学会『日本建築学会大会学術講演梗概集』、1993年、pp.1435-1436。
松村晃、加村隆志、五十嵐泉「沖縄本島における建築物の構造種別に関する調査研究：その1研究概要」、日本建築学会『日本建築学会大会学術講演梗概集』、2002年、pp.1069-1070。「沖縄本島における建築物の構造種別に関する調査研究：その2形成年代と構造種別」、日本建築学会『日本建築学会大会学術講演梗概集』、2002年、pp.1071-1072。等参照。
- 46) ケネス・フランプトン（松畑強、山本想太郎訳）『テクトニック・カルチャー 19-20世紀建築の構法の詩学』TOTO出版、2002年、p.138。フランプトンによれば、『装飾の文法』を著したオーウェン・ジョーンズ、建築家のルイス・サリヴァン、フランク・ロイド・ライトは「全員がケルト起源の反体制派であり、様式の折衷闘争という精神的破綻を克服するために」オリエントの探求に従ったという。フランプトンは、ライトのテキストにみられる「アナトリア製のトルコ敷物」や「オリエント風の敷物」といった言及について、レンガのテクスチャーや「テキスタイル・ブロック・システム」における「テキスタイルの隠喩」であると評している。
- 47) 仲座久雄と「花ブロック」の展開を考える時、ケネス・フランプトンによる「批判的地域主義」の問題が想起される。そういったテーゼを批判的に捉え直す上でも、戦後沖縄における建築と工芸の関係には問われるべき点が多い。たとえば現在でも金型職人による手作業で製作される「花ブロック」の金型。このような金工技術も戦後を起点とするのであろうか。あるいは戦前から続くなんらかの系譜のなかにあるのだろうか。内地、アメリカ、あるいはその他の地域との関係性なども気になる問題である。
- 48) 本研究ノートの資料収集に際し、合資会社山内コンクリートブロック、久田五月、杉原未希子、各位の多大なご教示、ご協力に感謝する。

図版出典

図版 4、11、12、14

沖縄県立博物館『戦前・戦後の文化財保護～仲座久雄の活動をとらえて～』（企画展図録）、2004年、p.24、p.36。

図版 9

経済産業省産業技術環境局産業基盤標準化推進室「建築用コンクリートブロックのJISを改正－資源循環型社会への対応に向けて、より使いやすい規格をめざして－」、2010年。<http://www.jisc.go.jp/newstopic>

s/2010/201010concreteblock.pdf, p. 2.

図版 10—①、②

合資会社山内コンクリートブロック <http://www.yamauchi-cb.jp>, 製品カタログ p. 4, p. 6.

図版 15

ケネス・フランプトン (松畑強、山本想太郎訳) 『テクトニック・カルチャー 19-20 世紀建築の構法の詩学』 TOTO 出版、2002 年、p. 185.

図版 16

吉田鋼市 『オーギュスト・ペレ』 鹿島出版会、1985 年、p. 83.

図版 19

沖縄県立博物館 『沖縄県立博物館総合案内』、1998 年、p. 57.

※ その他の図版は個人撮影による。

(多摩美術大学非常勤講師)